

亡き夫とともにこの道を歩む。

朝霞教会 清水佑季子さん

清水さんの半生は試練の連続だった。長男のダウン症、夫の上咽頭がん、自身のパニック障害、その後、夫はくも膜下出血で意識不明の寝たきりに。だが、悲嘆にくれながらも乗り越えてこられたのは、仏教を共に学ぶ仲間たちの存在だった。同じように子どもの発達の問題を抱えながらも笑顔を絶やさぬ人や病に侵されても毎日を感謝で送る人。そうした人たちの交流により、「苦にとらわれずに、現実をありのままに受けとめ、一瞬一瞬を一所懸命に生きよう」と決心。意識のない夫に語りかける日々でも不思議と心は落ち着いていた。約4年におよぶ闘病の末に亡くなってしまった今でも、「いつもそばで夫が見守ってくれている」と安心感に包まれている。長男は頼もしく成長し、清水さんとともに信仰に親しんでいる。その姿を見ることが、いまの大きな喜びであり、生きがいとなっている。



慈しみの眼をもつて

「慈眼をもつて衆生を視る 福聚の海無量なり」——
 法華経「観世音菩薩普門品」の名句として知られる一節です。慈悲の眼で衆生を視れば無量の福が聚まるというのですが、慈悲の眼で世間や人びとを見るとは、どのようなことを大切にする見方なのでしょうか。
 ある詩人が、その答えともいえる仏の教えの真実をやさしく説き明かしています。その作品の一部をご紹介します。

「わたしが人を責めることをしないならば／それが観世音菩薩であり／あなたがわたしを許してくださいならば／そこに聖観世音菩薩は 現前しておられる／観世音菩薩というのは／世界を流れている 深い慈愛心であり／あなたの内にも わたしの内にも流れている／ひとつの 深い慈悲心のことなのである」
 この詩を手がかりに考えれば、だれのなかにも、観世音菩薩と同様の深い慈悲心が流れていると見ることができます。そして、一人ひとり別々の生き方をしても、ともに全体のなかの一人として自己一体の大きな「いのち」を生きており、互いにそのような尊い命をいただいていると見ることができます。それが、無量の福を呼ぶ慈しみの眼といえるのです。

立正佼成会